

令和 7 年 安孫子賞（昭和 35 年創設 第 66 回）

○山口 善紀 氏（厚真町、果樹（ハスカップ）経営）

1) 経営面積が 4.3ha の果樹（ハスカップ）専業経営で、観光農園も営んでおり、労働力は、世帯主、妻、母、妹夫妻およびパート雇用 7 名の合計 12 名である。また、加工販売にも取り組んでおり、労働力は妻およびパート雇用 1 名の合計 2 名である。2019 年に「株式会社あつまみらい」を設立し、2020 年における売上高は約 2,800 万円である。

2) 1978 年にハスカップ栽培、2003 年に観光農園を開始した。2002 年に就農し、2005 年の経営移譲を機にハスカップ専業に転換した。その際に日本一のハスカップ農家になる、厚真町を日本一のハスカップ産地にすることを目標にした。冷凍ハスカップ、ジャムなどの加工販売、ハスカップスムージーやクレープを提供するカフェの運営、移動販売に加え、全国の催事に参加し、ネットショップを開設するなど、厚真産ハスカップの魅力発信、ブランド化、販路拡大に貢献した。

3) 2009 年に糖度が高く、大粒で、日持ち性が良い新品種「あつまみらい」「ゆうしげ」を品種登録し、町内生産者にこれらの苗木を提供しており、2013 年には栽培面積で日本一、2018 年には生産量で日本一となり、2024 年に「厚真産ハスカップ」が地域団体商標に認定された。栽培技術の向上と販路開拓を目的とした生産組織の会長などを務めるとともに、新規就農を目指す後継者や参入者の技術指導を行うなど積極的な受け入れ体勢を整えている。作業の軽減・省力化のため、自律走行無人草刈機の導入、ハスカップ洗浄機の検討、収穫機の試作検討など、新技術に率先して取り組んでいる。

選考委員会では、堅実な経営を築いていることに加え、糖度が高く、大粒で、日持ち性が良い新品種「あつまみらい」「ゆうしげ」を選抜し、品種登録したこと、町内生産者にこれらの苗木を提供して厚真町を栽培面積および生産量で日本一とし、地域農業の維持発展に大きく貢献したことが評価された。

令和 7 年 北農賞（昭和 15 年創設 第 86 回）

○品種：ナタネ「ペノカのしずく」

受賞者名：大塚しおり 氏、石黒浩二 氏、根本英子 氏、原 尚資 氏
（農研機構北海道農業研究センター）

川崎光代 氏

（農研機構東北農業研究センター）

*所属は試験研究実施時

1) 道央の水田輪作地帯では、ナタネは既存の作業機が使用でき、省力的に栽培できる輪作作物として重要である。北海道のナタネ生産量は 2,550 トンで全国の 80%以上を占めている。これまでの主力品種「キザキノナタネ」は人に有害なエルシン酸含量が低く、家畜に有害なグルコシノレート含量が高いシングルロー品種である。輸入飼料価格が高騰するなか、タンパク質含量の高い搾油粕が飼料として利用できる寒地向けダブルローナタネ品種の育成が求められていたが、これまでに育成した品種は子実が極めて小さかったことから、収穫調製の機械化体系が難しく普及するに至らなかった。

2) 寒地向けダブルロー品種「ペノカのしずく」を育成した。越冬性や耐病性、収量性、油分品質は「キザキノナタネ」と同程度であり、油糧作物として優れた特性を有し、搾油粕を家畜の濃厚飼料として利用できる。

3) 令和4年の品種登録後、国や北海道、ホクレン等と連携して「キザキノナタネ」からの切り替えを推進している。令和5年に北海道の優良品種に認定され、750haでの作付けが開始された。その後、順調に普及が拡大し、近年中に北海道のナタネ作付面積約1,000haのすべてが「ペノカのしずく」に置き換わる予定である。道央地域で「ペノカのしずく」を大規模に栽培するコントラクター等を中心に、搾油粕を家畜に給与する計画が検討されている。

カロリーベース食料自給率が4%程度の国産油糧作物の振興とともに、飼料自給率の向上にも寄与することが期待される。また、国産ナタネの販路が拡大されることで新規作付けも期待される。

○品種：メロン台木「どうだい4号」、「どうだい6号」

受賞者名：八木亮治 氏、地子 立 氏、平井 剛 氏、中野雅章 氏、
堀田治邦 氏、中住晴彦 氏、田中静幸 氏

(道総研花・野菜技術センター)

*所属は試験研究実施時

1) メロンの土壌伝染病害は薬剤による防除が困難であり、中でもえそ斑点病やつる割病（レース1,2y）は深刻な被害をもたらしている。花・野菜技術センターでは、つる割病（レース1,2y）抵抗性台木「どうだい1号」および「どうだい2号」、えそ斑点病抵抗性台木「どうだい3号」を育成してきた。これらの台木品種は病害抑制効果が安定していることから、急速に広まったが、二つの病害が同一圃場で混発したり、産地の生産者ごとに異なる病害が発生するようになり、えそ斑点病やつる割病（レース1,2y）の双方に抵抗性を有する台木品種の育成が望まれていた。

2) 「どうだい4号」は、接木の作業性に優れるとともに、汎用性の高さから、普及されて20年が経過した現在でも、ふらの農業協同組合やきょうわ農業協同組合に所属する一部の生産者に活用されている。これらの生産者は、えそ斑点病を中心とした病害抑制効果と低温期の肥大性を評価している。一方で、「どうだい4号」は、つる割病（レース1,2y）抵抗性が「やや強」であり、菌密度が高い圃場での使用に難があるとされていた。

3) 「どうだい6号」は、接木の良好な作業性やえそ斑点病抵抗性といった「どうだい4号」の特長を受け継ぐとともに、つる割病（レース1,2y）の抵抗性が「強」に強化された台木品種であり、レース1,2yの発生が危惧される圃場で多く使用されている。「どうだい6号」は、中でも、夕張市農業協同組合において「夕張メロン」の台木として10年以上にわたり使用されており、「夕張メロン」をモデルにした産地維持に係る経済効果が約11億円と見込まれる。民間種苗会社により常に台木新品種が育成される中、現時点においても道内のメロン台木の約10%のシェアを占めている。夕張市に限らず、「どうだい6号」を台木として活用するメロン産地において、その生産を支えている。

「どうだい4号」および「どうだい6号」は、10年以上もの間、道内のメロン産地で普及・活用されているメロン台木品種であり、北海道におけるメロンの生産継続に多大な貢献をしている。

○報文：バレイショ生産の省力化が可能となる防除畦の改良

(第92巻1号掲載)

受賞者名：朱里勇治 氏、辻 博之 氏
(農研機構北海道農業研究センター)

1) 加工・青果用バレイショの栽培において、収穫作業が労働時間の約 5 割を占める。収穫機上で礫や土塊など夾雑物、腐敗塊茎や病害塊茎の選別・除去作業が必要なためである。これらの作業は収穫作業速度の制限要因になっており、夾雑物混入の削減による省力化は重要な課題である。一方、防除作業では、トラクタに取付けた防除機や自走式の防除機で畦をまたいで作業しており、走行時の踏圧が土塊の発生要因になると考えられる。土塊が発生しやすい場所として防除畦を想定し、防除畦の改良が土塊発生量、夾雑物発生量、収量、収穫作業速度、作業体系と投下労働時間に及ぼす影響を検討した。

2) 防除畦の一部にバレイショを植えずに防除機やトラクタが通る防除通路とすることにより、防除畦で土塊発生量が減量することを実証した。面積あたりの植え付け畦数が約 8%減少し、周辺畦の補償作用により単位収量は慣行と同等であり、収穫作業時間が約 10%削減できると試算された。なお、土塊よりも礫が多発する圃場では作業速度に差が認められず、高水分条件で耕耘・砕土を行った圃場では土塊の減量効果が期待できないが、これらの圃場においても、収穫畦数の減少による収穫労働時間の短縮と種いもの使用量の削減効果が認められることを示した。

3) 新規の機械装置を必要とせず、収量も慣行栽培と同等で、労働時間が削減でき、種いもの使用量を減らせることを示した。十勝やオホーツク管内を中心に普及が着実に進んでおり、作付面積では、加工・青果用の 6 割程度、澱粉原料用の 1 割程度、種子用の多くで普及しており、全道のバレイショの半数近くに普及していると考えられる。

生産現場への実装性が高く、小麦播種作業との競合回避、バレイショ生産面積維持・回復への貢献など、北海道農業の発展への寄与が大きい。

○技能：ソバ脱穀作業用動力粗選別機の考案

受賞者名：高倉朋宏 氏
(農研機構北海道農業研究センター)

1) 北海道農業研究センターにおけるソバ育種研究では、毎年約 100 系統を 3 反復栽培し、子実の特性調査を行っている。ソバの脱穀作業には数段階の作業工程があり、精選前の粗選別工程では、篩を用いて手作業により茎と種子を分別している。短期間に効率的に処理することが求められ、かがんだ姿勢で篩を左右に振り続ける必要があるため、肩、腰、膝に大きな負担がかかる。

2) 動力部分と篩部分からなる粗選別機を作製した。動力部分は電動モーターとプーリー、ベルトを利用した。篩部分は基本枠を鋼材により製作し、篩を載せる枠の車輪にベアリングを用いた。レールに篩を振動させる山を作ることによって、篩に振動を与えるとともに、枠の飛び出しの防止措置も施工した。また、篩を通過したサンプルが粗選別機の底部に設置した収集箱（ばんじゅう）に収集され、容易に取り出せる構造とした。

3) 本粗選別機の操作は、篩にサンプルを投入して電源を入れ、サンプルを時折攪拌するのみである。約 30 秒程度で篩い分けが完了する。手作業では 1 サンプルあたり約 3 分であったが、粗選別機では約 1 分半と半分程度に短縮された。さらに、作業姿勢が改善され、肉体的負担が大きく軽減した。

本粗選別機は、粗選別作業の効率化・軽労化を実現し、ソバ育種研究の進展に貢献している。